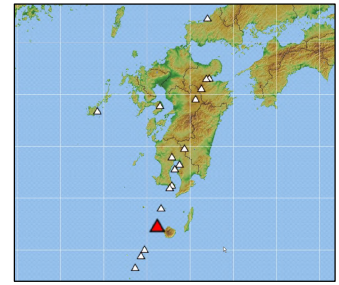


くちのえらぶじま
94. 口永良部島 Kuchinoerabujima

常時観測火山

北緯 30° 26 36 東経 130° 13 02 標高 657m (古岳) (標高点)



口永良部島全景 東側から 1996年7月23日 気象庁撮影

概要

長径(西北西～東南東)12km、最大幅 5km のひょうたん形の島。古い火山体である西部の番屋ヶ峰と現在まで活動を続けている島の中央部から東部を構成する新岳・古岳・野池山などの火山体からなる。最近の 10,000 年間の噴火は古岳・新岳・鉢窪火山で発生している。

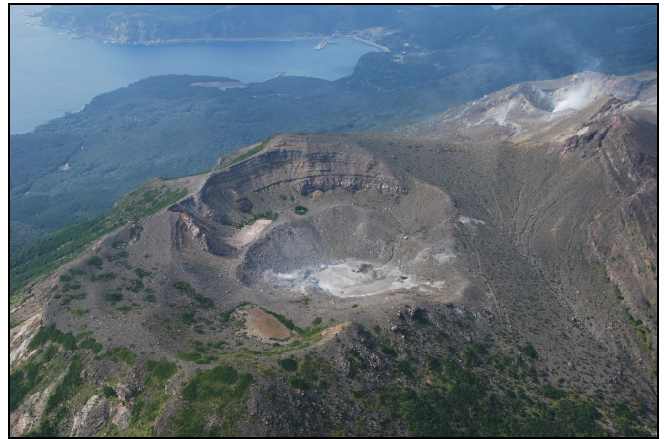
古岳南西～南東山麓には複数の安山岩質溶岩流が確認でき、7,300 年前より新しいと考えられる(下司・小林, 2006)。この溶岩流を覆う火砕流堆積物は、古岳山頂火口を囲む火砕丘に連続しており、小林・他(2002)では、この堆積物中の木炭から約 200 年前の放射年代測定値を得ている。このことから、古岳火口では数百年前まで火砕流を伴う噴火が発生していたと考えられる。

新岳は古岳の北西に開いた崩壊地形内に成長し、新岳山頂部を構成する火砕丘は火山角礫層からなり、火山弾や冷却節理を持つ岩塊を多く含む。また、複数火山灰層を確認できることから、古岳あるいは新岳で過去 1,000 年以内に複数回の爆発的なマグマ噴火があったと考えられる。安山岩の SiO₂ 量は 54.5～60.5 wt.% である。

写真



新岳火口と割れ目火口 東側上空から
2000年4月24日 気象庁撮影



古岳火口と新岳火口 (右奥) 南東側上空から
2009年3月2日 気象庁撮影



1980年9月28日新岳の割れ目噴火(東方向より)
1980年10月10日 撮影 京都大学火山活動研究センター 提供

火口周辺図

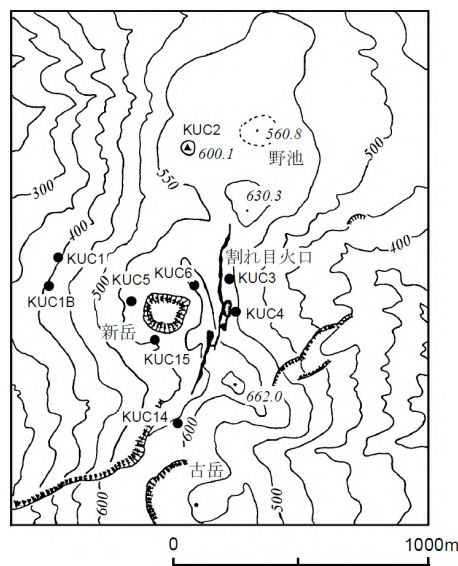


図 94-1
口永良部島新岳火口周辺図
(井口・他, 2007).

地形図

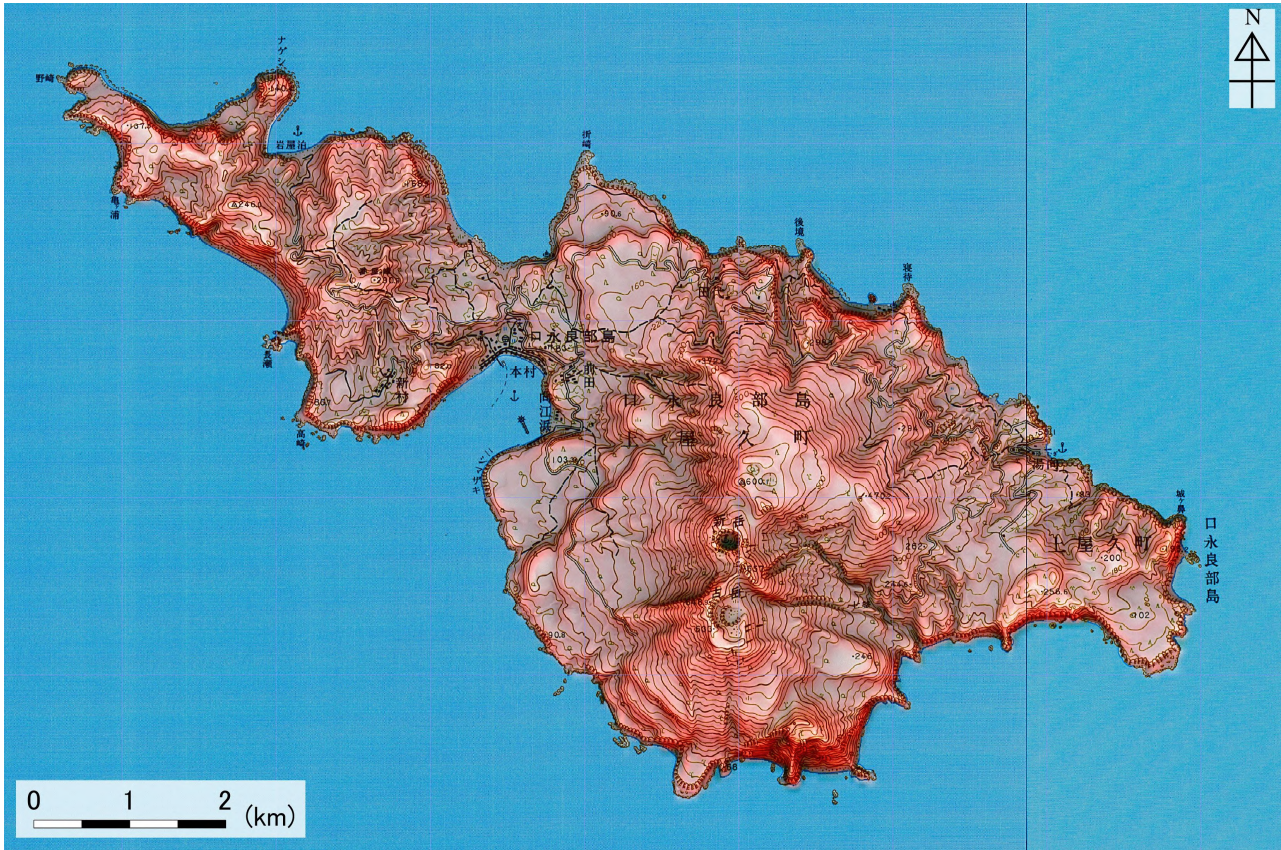


図 94-2 口永良部島の地形図.

国土地理院発行の5万分の1地形図(口永良部島、屋久島西北部)及び数値地図50mメッシュ(標高)

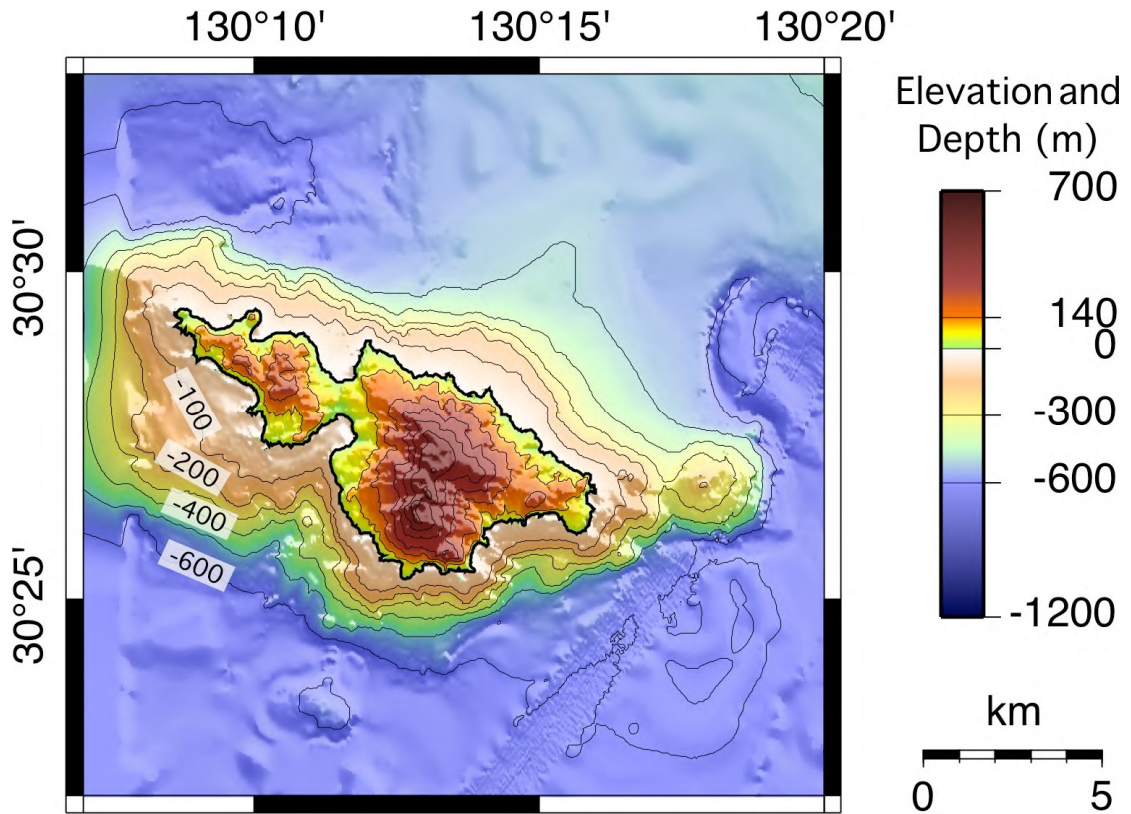


図 94-3 口永良部島周辺の海底地形図 (海上保安庁海洋情報部).

地質図

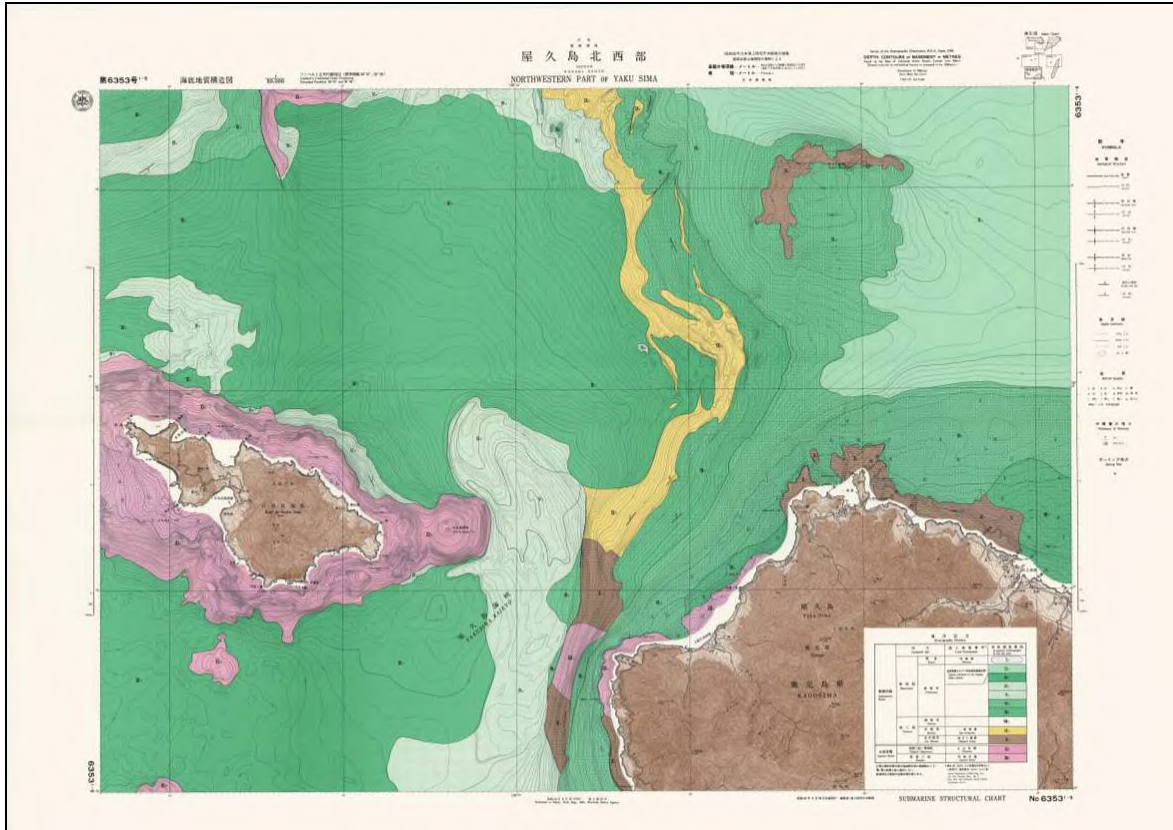


图 94-4 口永良部島周辺の地質構造図 (海上保安庁, 1981).

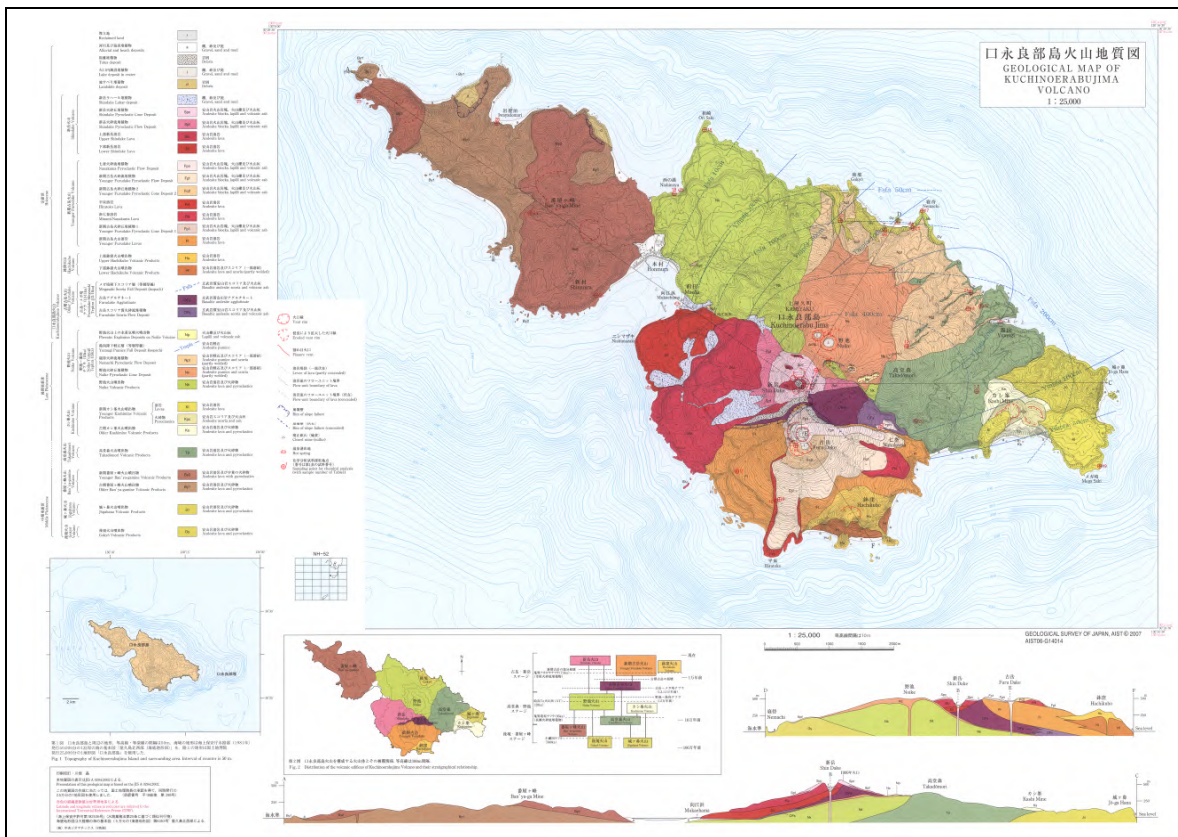


图 94-5 口永良部島地質図 (下司・小林, 2007).

噴火活動史

・過去1万年間の噴火活動

最近10,000年間の活動は、古岳・新岳・鉢窪火山で発生している(下司・小林, 2006; 2007)。古岳火山南西～南東山麓には複数の安山岩質溶岩流が発達する。表層に分布する溶岩流の上には鬼界アカホヤ火山灰層が認められないことから、現在の表層に分布する溶岩流は7,300年前より新しいと考えられる(下司・小林, 2006)。

新岳火山から流出する新岳溶岩はその古地磁気解析から11世紀あるいは9世紀に噴出したと考えられている(味喜・他, 2002)。

噴火年代	噴火場所	噴火様式	主な現象・マグマ噴出量
11 3ka 9,13	古岳火口 ^{9,13}	マグマ噴火 ^{9,13}	溶岩流、火砕物降下。 マグマ噴出量は0.01 DREkm ³ 。(VE13) ¹³
11 0.2ka 9	古岳火口 ^{9,13}	マグマ噴火, マグマ水蒸気噴火, 水蒸気噴火 ^{9,13}	火砕物降下、火砕流。 マグマ噴出量は0.05 DREkm ³ 。(VE14) ¹³
7.3 3ka 9,13	鉢窪火口 ^{9,13}	マグマ噴火 ^{9,13}	溶岩流、火砕物降下。 マグマ噴出量は0.05 DREkm ³ 。 ¹³
3.5 3.4ka ⁹	古岳火口 ^{9,13}	マグマ噴火 ^{9,13}	火砕物降下。
3 1ka ¹²	古岳火口 ^{9,13}	マグマ噴火 ^{9,13}	溶岩流。 マグマ噴出量は0.05 DREkm ³ 。 ¹³
1.5 1.3ka ⁹	古岳火口 ^{9,13}	マグマ水蒸気噴火 ⁹	火砕物降下。
1.3 1ka ¹⁰	新岳火口 ^{9,10,13}	マグマ噴火 ^{9,13}	溶岩流。 マグマ噴出量は0.24 DREkm ³ 。 ⁹
1ka ⁹	古岳火口 ^{9,13}	マグマ噴火 ^{9,13,16,22}	溶岩流。 マグマ噴出量は0.05 DREkm ³ 。 ⁹
1 0.02ka ^{9,12}	新岳火口 ^{9,13}	マグマ噴火, マグマ水蒸気噴火, 水蒸気噴火 ^{9,13}	火砕物降下、火砕流。 マグマ噴出量は0.005 DREkm ³ 。(VE13) ¹³
1 0.8ka ⁹	新岳あるいは古岳火口 ⁹	マグマ水蒸気噴火あるいは水蒸気噴火 ⁹	火砕物降下。
1 0.5ka ⁹	新岳あるいは古岳火口 ⁹	水蒸気噴火 ⁹	火砕物降下。
0.8 0.034ka ⁹	新岳あるいは古岳火口 ⁹	マグマ噴火あるいはマグマ水蒸気噴火 ⁹	火砕物降下。
0.8 0.034ka ⁹	新岳あるいは古岳火口 ⁹	マグマ噴火あるいはマグマ水蒸気噴火 ⁹	火砕物降下。
0.8 0.034ka ⁹	新岳火口 ⁹	水蒸気噴火 ⁹	火砕物降下。
0.8 0.034ka ⁹	新岳あるいは古岳火口 ²²	マグマ噴火あるいはマグマ水蒸気噴火 ⁹	火砕物降下。
0.6 0.5ka ⁹	新岳あるいは古岳火口 ⁹	水蒸気噴火 ⁹	火砕物降下。
0.5 0.34ka ⁹	新岳あるいは古岳火口 ⁹	水蒸気噴火 ⁹	火砕物降下。
0.3 0.2ka ^{11,25}	新岳あるいは古岳火口 ⁹	マグマ噴火 ⁹	火砕流。 マグマ噴出量は0.001 DREkm ³ 。(VE12) ¹³

噴火イベントの年代、噴火場所、噴火様式等については、(独)産業技術総合研究所の活火山データベース(工藤・星住, 2006-)を参考に、文献の追記を行った。なお、年代は暦年代で示す。表中の「ka」は「1000年前」を意味し、西暦2000年を0 kaとして示した。

A B: A年からB年までの間のどこかで起こった噴火イベント

A B : A年からB年までの間, 継続して起こった一連の噴火イベント

A < B : A年以前に起こった噴火イベント

・有史以降の火山活動 (は噴火年を示す)

年代	現象	活動経過・被害状況等
1841(天保 12)年 2,4	噴火 ^{9,13}	5月23日。噴火場所は新岳 ^{9,4} 。 8月1日。村落焼亡、死者多数。噴火場所は新岳 ^{9,4} 。
1914(大正 3)年 26	鳴動、地形変化、 溶融硫黄噴出 ²⁵	1月。火口底陥没 ²⁵ 。
1931(昭和 6)年 4,5,6,7,8,26	噴火 ^{9,13,26}	噴火場所は新岳火口西縁 ^{4,5,6,7,8,26} 。 3月から鳴動。4月2日に爆発(新岳の西側山腹)。土砂崩壊、負傷者2名、馬、山林田畑被害。5月15日にも爆発、降灰。硫黄流出、土地隆起。
1932(昭和 7)年 24	噴煙、鳴動	7月23日頃～。
1933～34(昭和 8 ～ 9)年 ^{5,6,7,8}	噴火 ^{9,13}	噴火場所は新岳火口 ^{5,6,7,8} 。 1933年12月24日から翌1月11日にかけて数回噴火。七釜集落全焼、死者8名、負傷者26名、家屋全焼15棟、牛馬や山林耕地に大被害。
1945(昭和 20)年 3	噴火 ^{9,13}	11月3日。噴火場所は新岳火口東外壁 ³ 。 割れ目噴火、噴石、降灰。
1966(昭和 41)年 2,3	噴火 ^{3,4}	11月22日。噴火場所は新岳 ^{2,3} 。負傷者3名、牛被害1頭。 空振は、鹿児島市や種子島でも体感 ² 。小規模火砕流の発生 ³ 。
1968～69(昭和 43～44)年 ^{15,16,17,18}	噴火 ^{9,13}	12月～翌年3月。噴火場所は新岳 ^{15,16,17,18} 。
1972(昭和 47)年 19	噴火 ^{9,13}	9月2日。噴火場所は新岳 ¹⁹ 。
1973(昭和 48)年 14,20	噴火 ^{9,13}	11月5～19日。噴火場所は新岳 ^{14,20} 。
1974(昭和 49)年 21	噴火 ^{9,13}	6月3日。噴火場所は新岳 ²¹ 。
1976(昭和 51)年 22	噴火 ^{9,13}	4月2日。噴火場所は新岳 ²² 。山麓で爆発音が聞こえる。降灰が北西約2kmの向江浜、前田で約1cm積もる。
1980(昭和 55)年 2	小規模：水蒸気 噴火 ²	9月28日。噴火場所は新岳東側斜面 ¹ 。多数の爆裂火口が新岳の東側斜面に南北800mのほぼ直線上の割れ目に沿って生じた(昭和20年の割れ目と同じ場所)。噴出量は0.0001 km ³ 。(VEI1) ¹
1982(昭和 57)年 23	噴気 ²³	10月。新岳火口北東に噴気孔4ヶ所生成。
1996(平成 8)年 27	地震	1～6月。火山性地震増加。
1999～2000(平 成 11～12)年 ^{28,29}	地震	1999年7月～翌年2月。火山性地震増加。北東海域で地震多発。
2003(平成 15)年	地震、火山性微 動	1～2月。火山性地震増加。火山性微動が2月から観測されるようになる。
2004(平成 16)年	地震、火山性微 動	2月。火山性地震増加。火山性微動は引き続き時々発生。
2005(平成 17)年	地震、火山性微 動、地殻変動、 噴気	火山性地震はやや多い状態。火山性微動は引き続き時々発生。2～4月にかけて、噴気活動がやや活発化。1月から5月まで新岳火口付近の膨張を示す変化が認められた。
2006(平成 18)年	地震、火山性微 動、地殻変動	火山性地震や火山性微動がやや多い状態。9月から12月まで新岳火口付近の膨張を示す変化が認められた。
2007(平成 19)年	地震、火山性微 動	火山性地震や火山性微動は消長を繰り返しながらやや多い状態。
2008(平成 20)年	地震、火山性微 動、地殻変動	9月4日に振幅のやや大きな火山性地震が一時的に増加。9月頃から翌年2月にかけて新岳火口付近の膨張を示す変化が認められ、火山性微動もやや多い状態が続いた。10月から新岳南壁で白色噴煙活動が始まる。

年代	現象	活動経過・被害状況等
2009(平成 21)年	地震、火山性微動	火山性微動は 4 月に増加。火山性地震は 9 月に増加。
2010(平成 22)年	地震、火山性微動、地殻変動	火山性地震は、1 月から 4 月に増加。火山性微動は 3 月と 12 月に増加。新岳火口付近の膨張を示す変化が 9 月から始まる。
2011(平成 23)年	地震	火山性地震は 12 月に増加。

噴火イベントの年代、噴火場所、噴火様式等については、(独)産業技術総合研究所の活火山データベース(工藤・星住, 2006-)を参考に、文献の追記を行った。

【引用文献】

1. 京都大学防災研究所・他(1981) 1980年(9月28日)の口永良部島新岳の噴火(概報), 火山噴火予知連絡会会報, 20, 1-9.
2. 鹿児島地方気象台・屋久島測候所(1967) 昭和41年11月22日の口永良部島新岳の爆発報告, 福岡管区気象台要報, 22, 79-98.
3. 荒牧重雄(1969) 口永良部島地質調査報告, 火山, 14, 127-132.
4. 中野嶽三(1932) 昭和6年の口永良部火山の噴火, 火山, 1, 69-72.
5. 松本唯一(1935) 口永良部島の地質に就いて, 火山, 2, 1-19.
6. 田中館秀三(1938) 口永良部島新岳噴火と火口の形態および向江浜の山津波, 火山, 4, 339-354.
7. 本間不二男(1934) 昭和8年12月乃至昭和9年1月の口永良部島新岳の火山活動, 地球, 21, 243-266.
8. 本間不二男(1934) 口永良部島地質と火山活動(一), 火山, 1, 20-39.
9. 下司信夫・小林哲夫(2006) 鹿児島県口永良部島火山最近3万年間の噴火活動, 火山, 51, 1-20.
10. 味喜大介・他(2002) 口永良部島新岳の溶岩流の古地磁気学的年代測定, 全国主要活火山の集中総合観測, 薩摩硫黄島火山・口永良部島火山の集中総合観測, 159-168.
11. 小林哲夫・他(2002) 口永良部島火山の活動史, 全国主要活火山の集中総合観測, 薩摩硫黄島火山・口永良部島火山の集中総合観測, 169-184.
12. 下司信夫・小林哲夫(2007) 口永良部島火山地質図, 火山地質図, 産業技術総合研究所, 14.
13. 下司信夫・小林哲夫(2009) 口永良部島火山地質データベース, 数値地質図, 産業技術総合研究所(CD-ROM), V-3.
14. 角田寿喜(1974) 噴火の前兆としての地震活動 口永良部島新岳1973年11月5日の噴火, 鹿児島県の地震と火山, 67-70.
15. 気象庁(1968) 火山活動, 気象要覧, 832, 51.
16. 気象庁(1969) 火山活動, 気象要覧, 833, 46-47.
17. 気象庁(1969) 火山活動, 気象要覧, 834, 44.
18. 気象庁(1969) 火山活動, 気象要覧, 835, 43-44.
19. 気象庁(1972) 火山活動, 気象要覧, 877, 46-47.
20. 気象庁(1973) 火山活動, 気象要覧, 891, 37-38.
21. 気象庁(1974) 火山活動, 気象要覧, 898, 38-41.
22. 気象庁(1976) 火山活動, 気象要覧, 920, 40-41.
23. 気象庁(1983) 火山活動, 気象要覧, 998, 47.
24. 気象庁(1932) 火山活動, 気象要覧, 395, 999.
25. 藤野直樹・小林哲夫(1993) 口永良部島火山の地質と最近の噴火活動, 地球惑星科学関連学会1993年合同大会予稿集, 321.
26. 鹿児島測候所(1931) 昭和6年4月2日口永良部島新岳の噴火, 1-10.
27. 山本圭吾・他(1997) 1996年口永良部島火山の地震活動の活発化について. 京都大学防災研究所年報, 40B-1, 39-47.
28. 福岡管区気象台・鹿児島地方気象台(2001) 口永良部島の火山活動 1999年10月~2000年1月, 火山噴火予知連絡会会報, 76, 120-122.
29. 福岡管区気象台・鹿児島地方気象台(2002) 口永良部島の火山活動 1999年10月~2000年1月, 火山噴火予知連絡会会報, 79, 156-158.

全岩化学組成

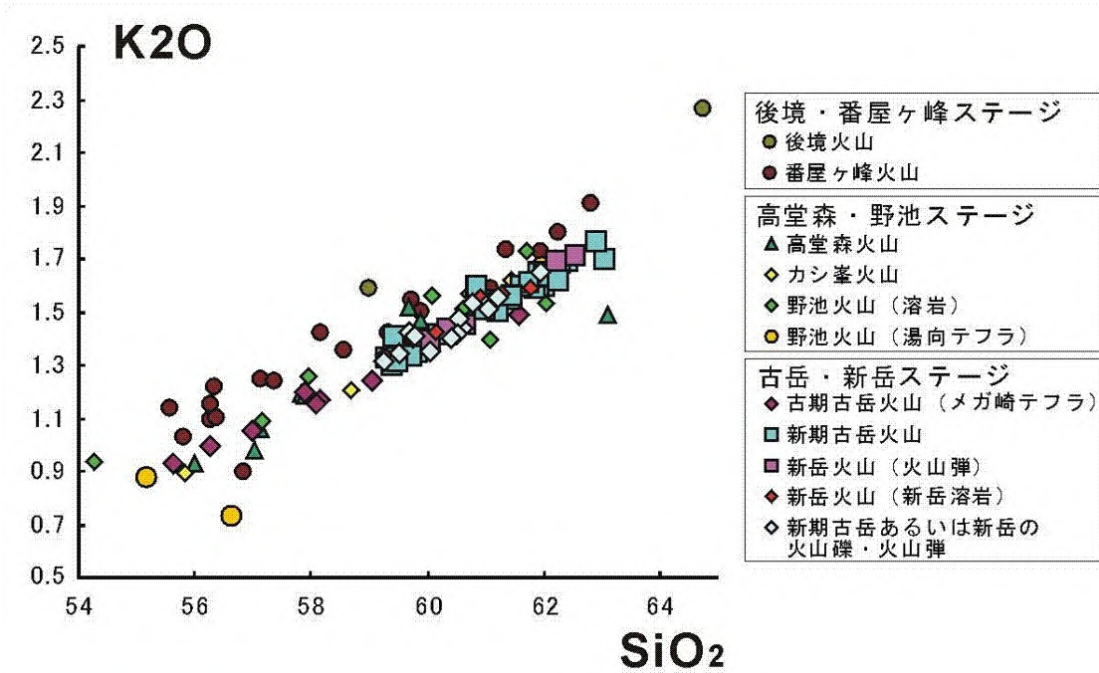


図 90-6 全岩化学組成図 (下司・小林, 2009).

過去の噴火における先駆現象等

近年の水蒸気噴火の数ヶ月前から噴煙の増加や鳴動があった。

なお、噴火には至っていないが、近年、火山性地震の活発化や山頂直下浅部の膨張、噴気活動の活発化が繰り返されている。

主な火山活動 ・ 1966 年の噴火

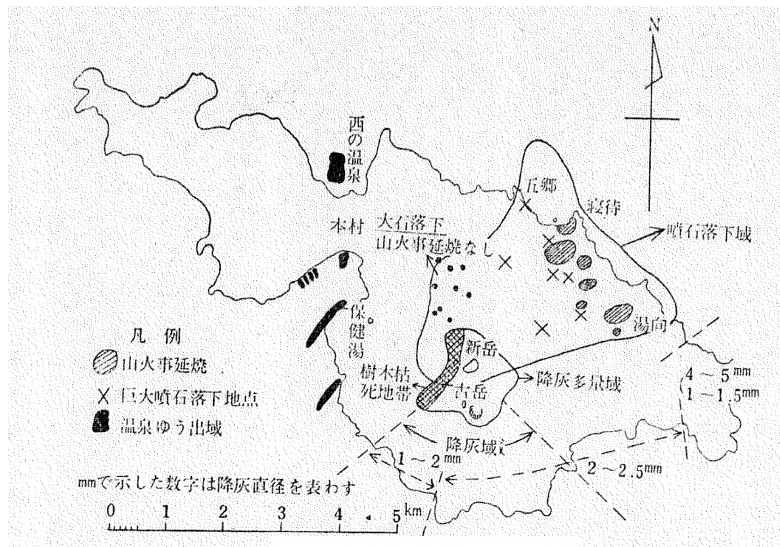


図 94-7 口永良部島 1966 年 11 月 22 日噴火による噴石降灰等の分布図
(鹿児島地方気象台・屋久島測候所, 1967).

噴石は主に北北東から東北東方向に飛散した。火口から北北東 3km の五郷海岸で直径 0.8 ~ 1m の噴石が、火口から北北東 2km の道路上に直径 5m の噴石落下の大穴がみられた。
また、降灰は火口から東ないし南南西の範囲にみられた。

・ 1980 年の噴火

9 月 28 日、新岳東側斜面で水蒸気爆発。多数の爆裂火口が新岳の東側斜面に南北 800m のほぼ直線上の割れ目に沿って生じた(昭和 20 年の割れ目と同じ場所)。

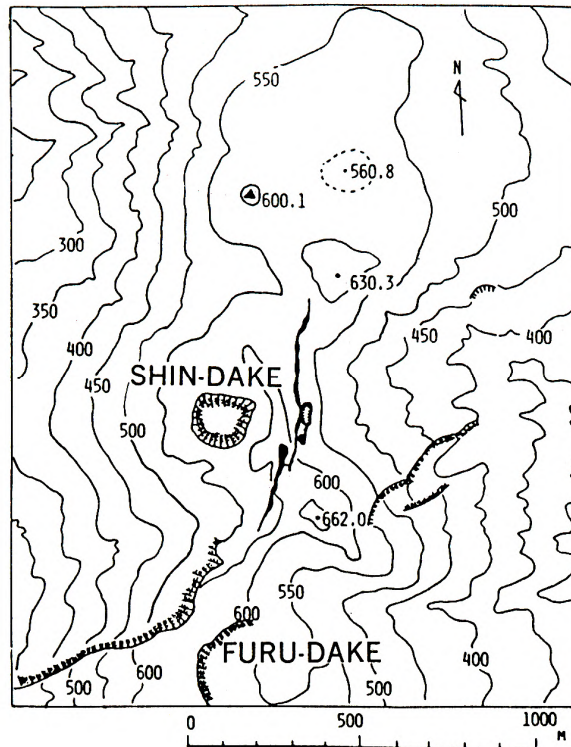


図 94-8 口永良部島 1980 年の割れ目噴火の位置 (京都大学・他, 1981).

近年の火山活動

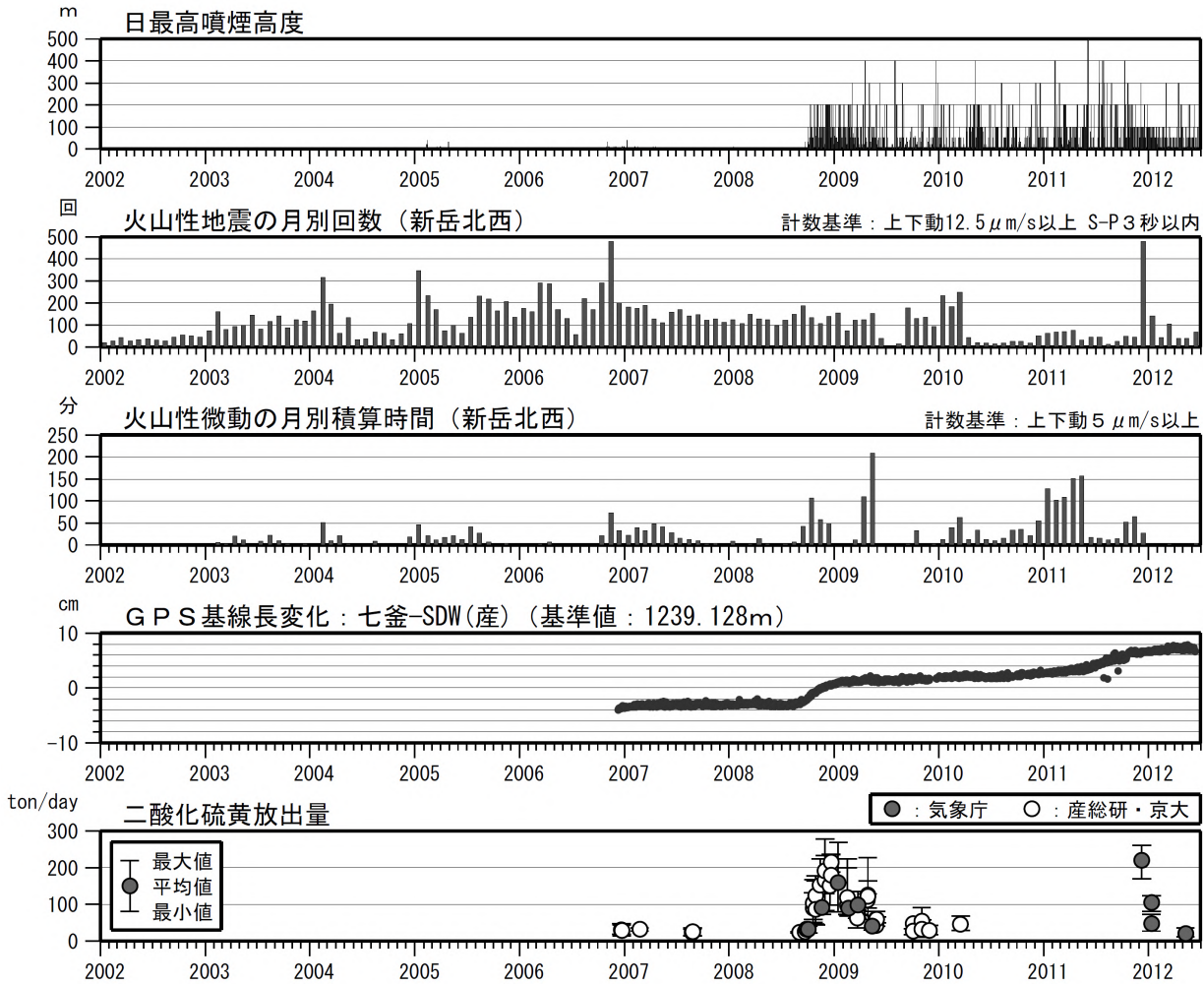


図 94-9 火山活動経過図 (2002年1月1日～2012年6月30日). 2005年12月15～28日は京都大学の地震計で回数を計数. 2002年12月22日～2003年1月11日は新岳北西の機器障害のため欠測. 2005年7月9日～9月18日, 11月5日～12月14日は新岳北西の機器障害のため古岳北で回数を計数. 1999年以降、火山性地震の活動が高まり、地震回数の増加が繰り返されている。2003年以降は火山性微動も観測されている。新岳火口周辺の地盤膨張が繰り返し観測されている。2008年以降、白色噴煙活動が続いている。

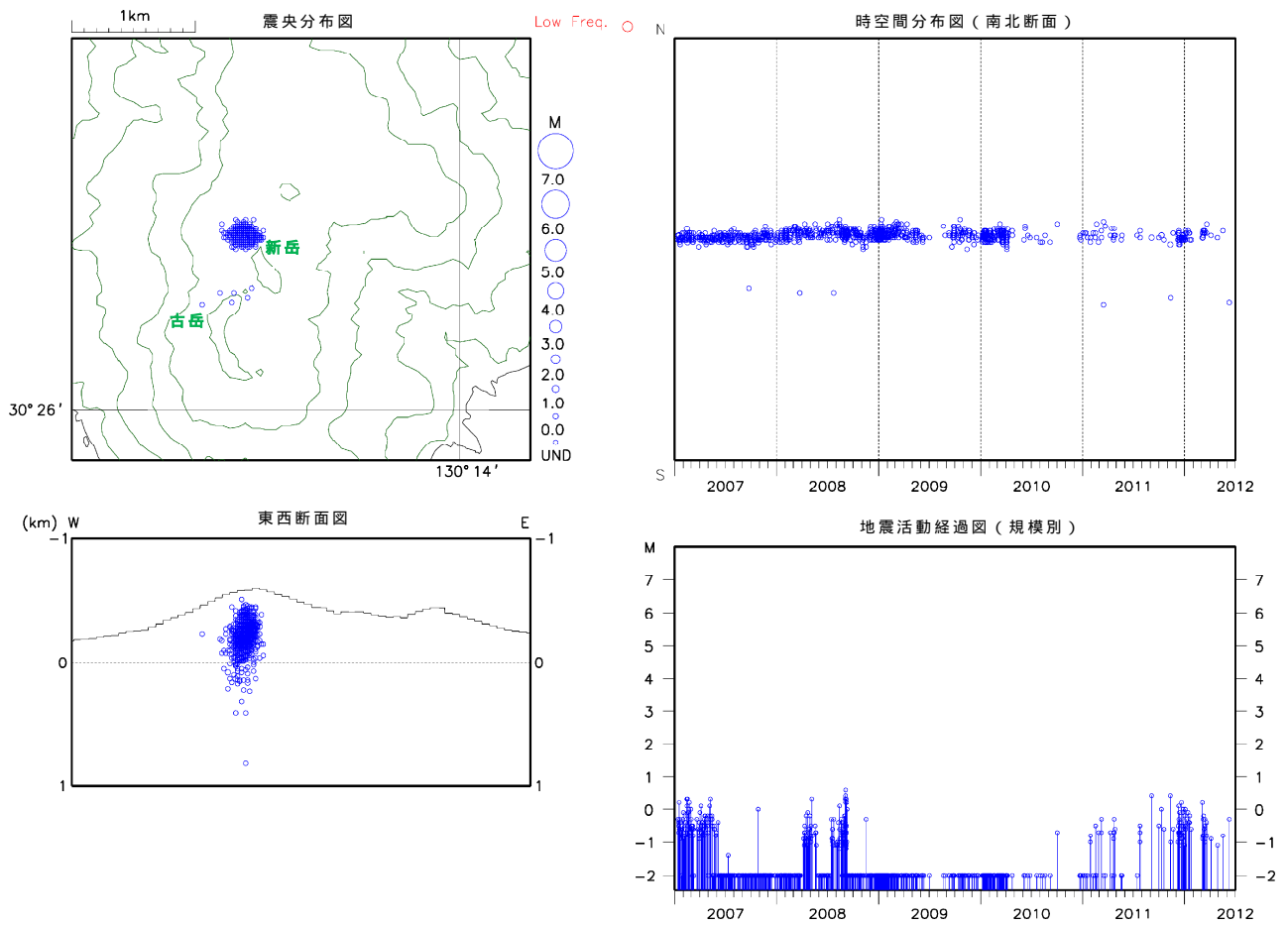


図 94-10 火山性地震の震源分布図 (2007 年 1 月 12 日 ~ 2012 年 6 月 30 日).

(94. 口永良部島)

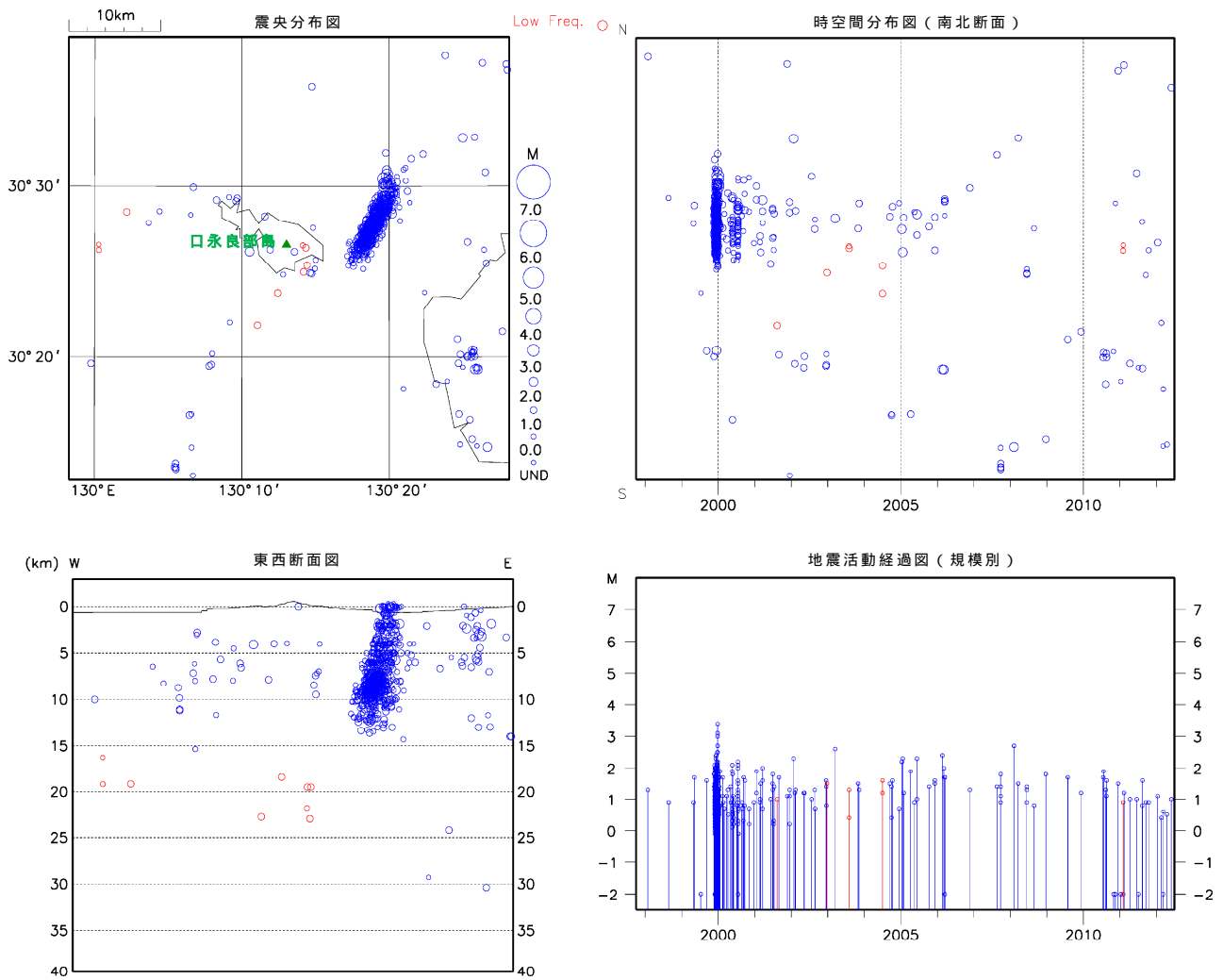


図 94-11 広域地震観測網による浅部の地震活動(青)及び深部低周波地震活動(赤) (1997年10月1日～2012年6月30日).

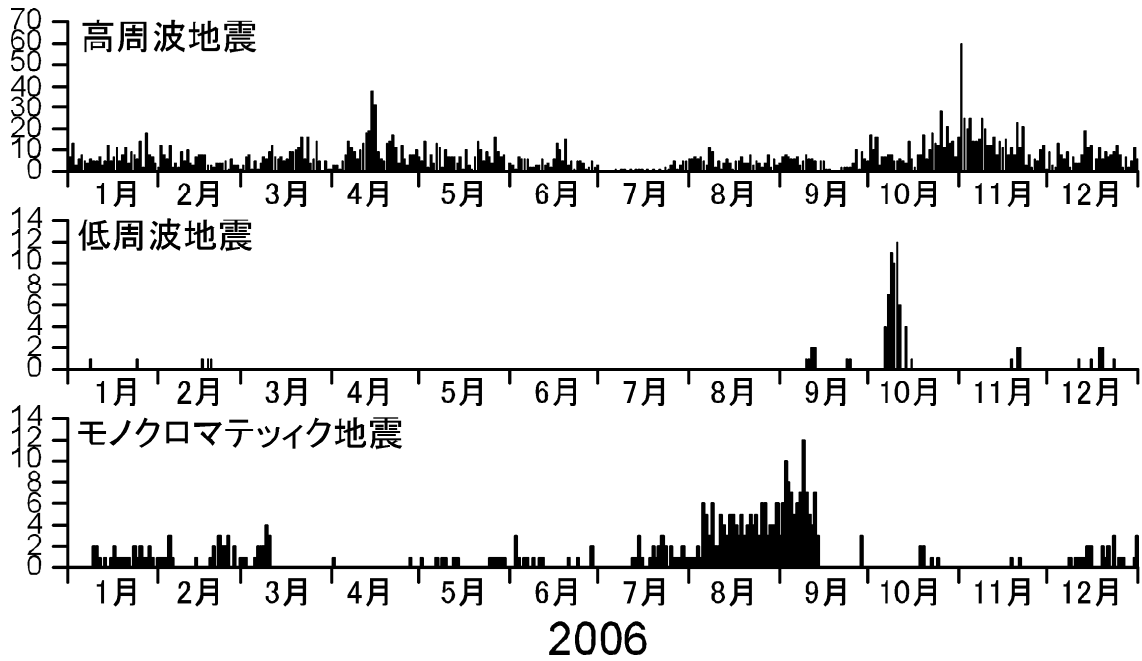


図 94-12 高周波地震, 低周波地震, 単色地震の日別発生回数の推移 (井口, 2008).

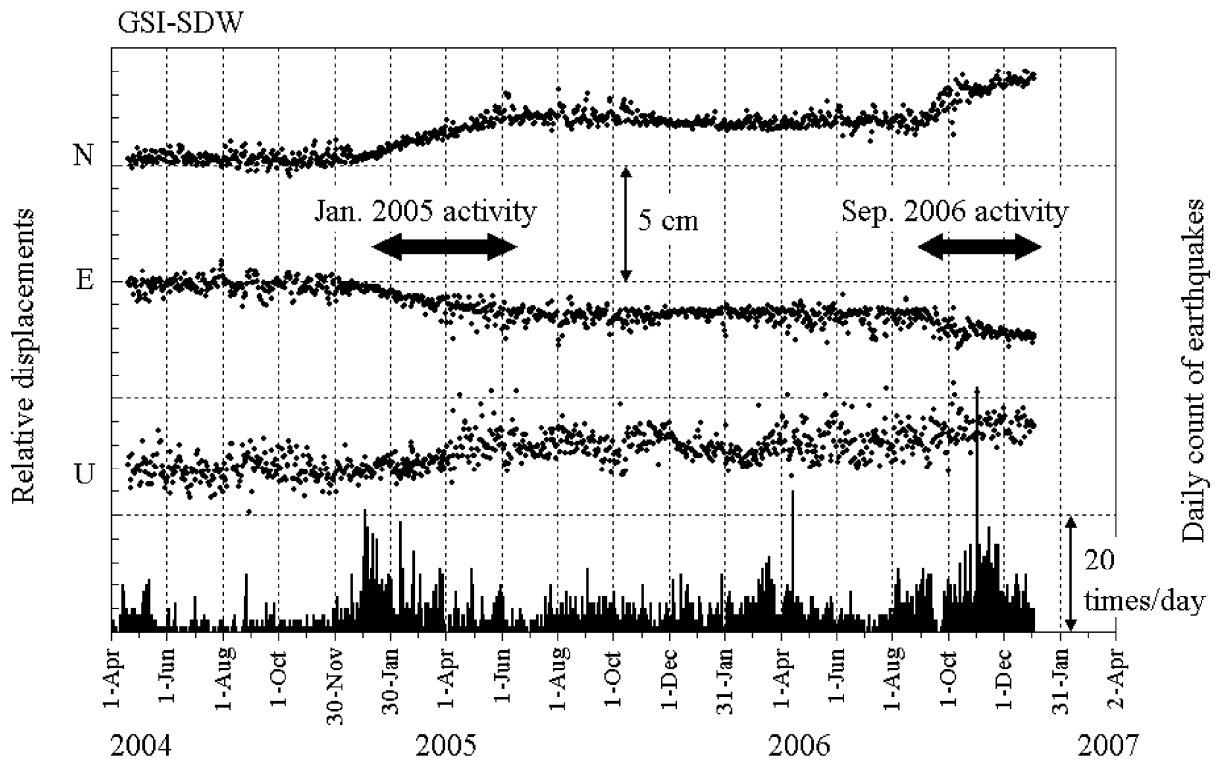


図 94-13 GPS 連続観測で捕捉された 2004 年以降の口永良部島の地盤変動 (齋藤・井口, 2007).
2005 年 1~6 月頃と 2006 年 9 月~2007 年 1 月に, 新岳浅部の圧力源の体積増加によると考えられる地盤変動がみられる.

(94. 口永良部島)

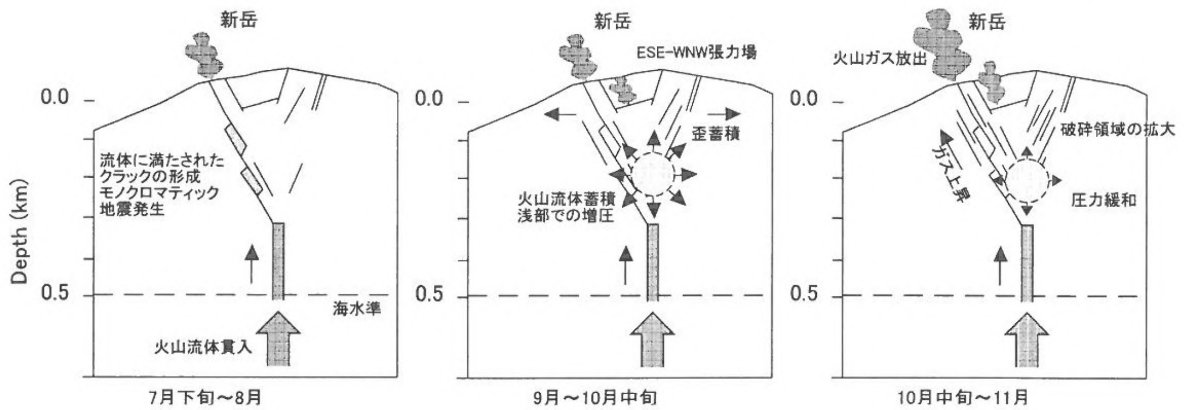


図 94-14 観測から推定される口永良部島の火山流体貫入と圧力緩和過程 (井口, 2008).

2006年7月下旬から8月: 火山性流体が貫入し, 地震が増加し始める.

2006年9月～10月中旬: 火山性流体の継続的貫入により, 浅部で膨張が観測された.

2006年10月中旬～11月: 歪蓄積の結果, 岩石が破壊され蓄積された火山性流体がもれ出す.

防災に関する情報

火山防災協議会

関係都道府県	火山防災協議会の名称	設置	最近の主な活動の内容
鹿児島県	口永良部島噴火災害対策連絡会議	1996	・活動活発時に、活動状況、避難の必要性の有無などを町長に助言
構成機関			
火山防災協議会のコアグループに相当する機関 (は事務局)		左に挙げた以外の構成機関	
県(防災部局) 鹿児島県危機管理局危機管理防災課 市町村 屋久島町 気象台 鹿児島地方気象台 砂防部局 火山専門家等 京都大学、鹿児島大学		関係機関 (国)第十管区海上保安本部、陸上自衛隊第12普通科連隊、海上自衛隊第1航空群、鹿児島運輸支局、鹿児島農政事務所 (警察・消防)鹿児島県警察本部、熊本地区消防組合 (その他)日本赤十字社鹿児島県支部、NTT西日本鹿児島支店、九州電力鹿児島支店	

関係都道府県	火山防災協議会の名称	設置	最近の主な活動の内容
鹿児島県	口永良部島火山防災連絡会 (前項の協議会において設置)	2010	・口永良部島火山の防災に関し機関間の情報の共有・連携及び意見交換を図るとともに、口永良部島火山の防災対応について検討
構成機関			
火山防災協議会のコアグループに相当する機関 (は事務局)		左に挙げた以外の構成機関	
県(防災部局) 鹿児島県危機管理局危機管理防災課 市町村 屋久島町 気象台 鹿児島地方気象台 砂防部局 火山専門家等 京都大学		関係機関 (国)第十管区海上保安本部	

火山ハザードマップ等

- ・「口永良部島火山災害危険区域予測図」
- ・「口永良部島防災情報図」
- ・いずれも鹿児島県 1996 年度作成

URL :

http://www.pref.kagoshima.jp/aj01/bosai/sonae/keikaku/h23/documents/24696_20120419165713-1.pdf

噴火警戒レベル (2007 (平成19) 年12月1日運用開始)

■口永良部島 噴火警戒レベルに対応した規制範囲



●噴火警戒レベルに応じて下記のような防災対応が必要になります。

- レベル5 (避難) : 危険な居住地域からの避難
- レベル4 (避難準備) : 警戒が必要な居住地域での避難準備。要援護者は避難等。
- レベル3 (入山規制) : 火口から概ね2km以内の立入禁止 ● の範囲内
- レベル2 (火口周辺規制) : 火口から概ね1km以内の立入禁止 ○ の範囲内
- レベル1 (平常) : 状況に応じて火口内への立入規制等。

- : 一般道
- : 登山道
- : 新岳火口
- : 居住区域
- | : レベル3の規制箇所
- | : レベル2の規制箇所

■この図は口永良部島防災情報図(鹿児島県地域防災計画)を元に屋久島町等と調整して作成しています。

■各レベルにおける具体的な規制範囲等については、地域防災計画等で定められていますので、詳細については屋久島町にお問い合わせください。

口永良部島の噴火警戒レベル

予報 警報	対象 範囲	レベル (キーワード)	火山活動の状況	住民等の行動及び登山 者・入山者等への対応	想定される現象等
噴火警報	居住地域及び それより火口側	5 (避難)	居住地域に重大な被害を及ぼす噴火が発生、あるいは切迫している状態にある。	危険な居住地域からの避難等が必要。	●噴火が発生し、噴石や火砕流、溶岩流が居住地域に到達、あるいはそのような噴火の発生が切迫している。 過去事例 1966年11月：噴石が火口から約3.5kmまで飛散
		4 (避難準備)	居住地域に重大な被害を及ぼす噴火が発生すると予想される（可能性が高まっている）。	警戒が必要な居住地域での避難の準備、災害時要援護者の避難等が必要。	●噴火が拡大し、噴石や火砕流、溶岩流が居住地域に到達することが予想される。 過去事例 1931年4月：新岳火口から約2kmまで噴石飛散 1841年8月：新岳火口から約2kmまで噴石飛散
火口周辺警報	火口から居住地域 近くまで	3 (入山規制)	居住地域の近くまで重大な影響を及ぼす（この範囲に入った場合には生命に危険が及ぶ）噴火が発生、あるいは発生すると予想される。	住民は通常の生活。状況に応じて災害時要援護者の避難準備等。登山禁止や入山規制等危険な地域への立入規制等。	●噴石が火口から概ね2km以内に飛散、あるいは小噴火の拡大等により飛散が予想される。 過去事例 1968年12月～1969年3月：噴石飛散 1945年11月、1933年12月：新岳で割れ目噴火、火口から約1.9kmまで噴石飛散
		2 (火口周辺規制)	火口周辺に影響を及ぼす（この範囲に入った場合には生命に危険が及ぶ）噴火が発生、あるいは発生すると予想される。	住民は通常の生活。火口周辺への立入規制等。	●小噴火が発生し、火口から概ね1km以内に噴石飛散。 1980年9月の噴火事例 新岳で割れ目噴火、火口から約700mまで噴石飛散 ●小噴火の発生が予想される。 過去事例 2006年9月の山体膨張 1996年3月、1999年8月、2000年1月、2003年2～4月の火山性地震増加 1932年7月：噴煙活動活発化
噴火予報	火口内等	1 (平常)	火山活動は静穏。火山活動の状態によって、火口内で火山灰の噴出等が見られる（この範囲に入った場合には生命に危険が及ぶ）。	状況に応じて火口内への立入規制等。	●火山活動は静穏、状況により火口内に影響する程度の噴出の可能性あり。 過去事例 2003年11月～2004年1月の状態

注) ここでいう噴石とは、主として風の影響を受けずに飛散する大きさのものとする。

各レベルにおける具体的な規制範囲等については地域防災計画等で定められています。各市町村にお問い合わせください。

■最新の噴火警戒レベルは気象庁HPでもご覧いただけます。

<http://www.seisvol.kishou.go.jp/tokyo/volcano.html>

主な火山情報の発表状況

(1965年1月1日の情報発表業務開始以降 2007年11月30日まで)

情報の種類	'65	'66	'67	'68	'69	'70	'71	'72	'73	'74	'75	'76
火山情報(臨時)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

情報の種類	'77	'78	'79	'80	'81	'82	'83	'84	'85	'86	'87	'88
火山活動情報 ¹		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
臨時火山情報 ¹	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

情報の種類	'89	'90	'91	'92	'93	'94	'95	'96	'97	'98	'99	'00
緊急火山情報 ²	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
臨時火山情報	-	-	2	-	-	-	-	1	-	-	1	-
火山観測情報 ²					-	-	-	2	-	-	12	3

情報の種類	'01	'02	'03	'04	'05	'06	'07
緊急火山情報	-	-	-	-	-	-	-
臨時火山情報	-	-	-	1	-	-	-
火山観測情報	-	-	3	18	27	3	-

1 昭和53(1978)年12月20日、火山活動情報、臨時火山情報、定期火山情報の3種類の火山情報の発表業務を開始。従来は火山情報(定期または臨時)を発表。

2 平成5(1993)年5月11日、火山活動情報を緊急火山情報と改正。火山観測情報を新設。

平成14(2002)年3月、常時観測火山だけで定期的に発表していた定期火山情報は廃止し、火山活動解説資料に発展解消。

噴火警報等の発表状況

(2007年12月1日の噴火警報及び噴火予報の運用開始以降2012年12月31日現在まで)

・噴火警報・予報

年月日	警報・予報	対象市町村等	内容
2007(平成19)年12月1日 10:05	噴火警報 ^{1 2} (噴火警戒レベル2、 火口周辺規制)	鹿児島県屋久島町	新岳(しんだけ)火口直下のごく浅いところで発生している火山性地震は、やや多い状態が継続。火山性微動も、2006年10月からやや多い状態で推移。 火口から半径約1km範囲に噴石を飛散させる程度の小規模な噴火発生が予想される。風下側では降灰等に注意が必要。
2008(平成20)年1月25日 14:00	噴火予報 (噴火警戒レベル2火口 周辺規制)から1(平常) へ引下げ)	鹿児島県屋久島町	火山活動は静穏。 火口内で噴気や火山ガスの噴出等が見られ、火口内等(この範囲に入った場合は生命に危険が及ぶ)では警戒が必要。
2008(平成20)年9月4日 10:00	噴火警報 (噴火警戒レベル1(平常) から2(火口周辺規制) へ引上げ)	鹿児島県屋久島町	火山活動が高まっていると考えられ、今後、火口周辺に影響を及ぼす噴火が発生する可能性。火口から1km程度の範囲では、弾道を描いて飛散する大きな噴石に警戒が必要。 風下側では、降灰及び風の影響を受ける小さな噴石に注意が必要。
2008(平成20)年10月27日 11:00	噴火警報 (噴火警戒レベル2火口 周辺規制)から3(入山 規制)へ引上げ)	鹿児島県屋久島町	9月以降、GPSによる地殻変動観測で新岳火口浅部の膨張を示す変化が継続。また、噴気や火山ガスの放出量も増加し、火山活動はさらに高まっている。 火口から概ね2kmの範囲に影響を及ぼす噴火の発生が予想される。噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石に警戒が必要。 風下側では降灰及び風の影響を受ける小さな噴石に注意が必要。
2009(平成21)年3月18日 15:00	噴火警報 (噴火警戒レベル3入山 規制)から2(火口 周辺規制)に引下げ)	鹿児島県屋久島町	新岳火口浅部のわずかな膨張を示す変化が、2009年2月以降鈍化。二酸化硫黄の放出量が2009年1月以降やや減少。また、火山性地震及び火山性微動は減少。火口から半径2km程度に影響を及ぼす噴火の可能性は低下。 火口から1km程度の範囲に影響を及ぼす噴火が発生する可能性があり、火口周辺では噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石に警戒が必要。風下側では降灰及び風の影響を受ける小さな噴石に注意が必要。
2009(平成21)年8月4日 11:00	噴火予報 (噴火警戒レベル2火口 周辺規制)から1(平常) に引下げ)	鹿児島県屋久島町	火山活動は静穏。 火口内で噴気や火山ガスの噴出等が見られ、火口内等(この範囲に入った場合は生命に危険が及ぶ)では警戒が必要。
2009(平成21)年9月27日 17:00	噴火警報 (噴火警戒レベル1(平常) から2(火口周辺 規制)へ引上げ)	鹿児島県屋久島町	火山活動が高まっていると考えられ、今後、火口周辺に影響を及ぼす噴火が発生する可能性がある。火口から概ね1kmの範囲では、弾道を描いて飛散する大きな噴石に警戒が必要。 風下側では、降灰及び風の影響を受ける小さな噴石に注意が必要。
2009(平成21)年10月30日 11:00	噴火予報 (噴火警戒レベル2火口 周辺規制)から1(平常) に引下げ)	鹿児島県屋久島町	火山活動は静穏。 火口内で噴気や火山ガスの噴出等が見られ、火口内等では警戒が必要。

2011(平成23)年12月15日15:00	噴火警報 (噴火警戒レベル1(平常)から2(火口周辺規制)へ引上げ)	鹿児島県屋久島町	火山活動が高まっており、今後、火口周辺に影響を及ぼす噴火が発生する可能性がある。火口から概ね1kmの範囲では、弾道を描いて飛散する大きな噴石に警戒が必要。 風下側では、降灰及び風の影響を受ける小さな噴石に注意が必要。
2012(平成24)年1月20日11:00	噴火予報 (噴火警戒レベル2(火口周辺規制)から1(平常)に引下げ)	鹿児島県屋久島町	火山活動は低下。 火口内では噴気活動が続いており、火山灰等の噴出する可能性。火口付近では火山ガスに対する注意が必要。

- 1 噴火警報及び噴火予報の発表開始に伴う発表
- 2 噴火警戒レベルの運用開始に伴う発表

・火山の状況に関する解説情報の発表状況

情報名	・07	・08	・09	・10	・11	・12
火山の状況に関する解説情報	-	35	28	6	5	6

避難実績及び入山規制等の実績

- ・避難状況はなし
- ・登山規制の状況

規制の現状

新岳火口内立入規制

過去の規制履歴

年月日	規制状況
2007年12月1日	新岳火口から1km以内立入規制。
2008年1月25日	解除。
2008年9月4日	新岳火口から1km以内立入規制。
2008年10月27日	新岳火口から2km以内立入規制に更新。
2009年3月18日	新岳火口から1km以内立入規制に更新。
2009年8月4日	解除。
2009年9月27日	新岳火口から1km以内立入規制。
2009年10月30日	解除。
2011年12月15日	新岳火口から1km以内立入規制。
2012年1月20日	解除。

- ・規制実施機関

屋久島町

社会条件等

人口

屋久島町 13,732 人 (口永良部島 156 人) (平成 23 年 10 月 31 日: 屋久島町住民基本台帳による)

国立・国定公園・登山者数等

- ・国立・国定公園: 屋久国立公園 (特別保護地区、特別地区、普通地域、海中公園地区)
- ・年間入込客 : 2,148 人 (平成 22 年度: 屋久島町調べ)

付近の公共機関

機関・部署名	所在地	電話番号
屋久島町役場 (本庁)	鹿児島県熊毛郡屋久島町小瀬田 469-45	0997-43-5900
口永良部出張所	鹿児島県熊毛郡屋久島町口永良部島 372	0997-49-2100

主要交通網

- ・航空 日本エアコミュータ: 鹿児島 - 屋久島
- ・高速船 種子屋久高速船: トッピー (260 名)、ロケット (252 名): 鹿児島 - 屋久島
- ・船舶 町営船フェリー太陽 (100 名): 屋久島 - 口永良部島
折田汽船フェリー屋久 2 (494 名): 鹿児島 - 屋久島
鹿商海運: フェリーはいびすかす (212 名): 鹿児島 - 種子島 - 屋久島

関連施設

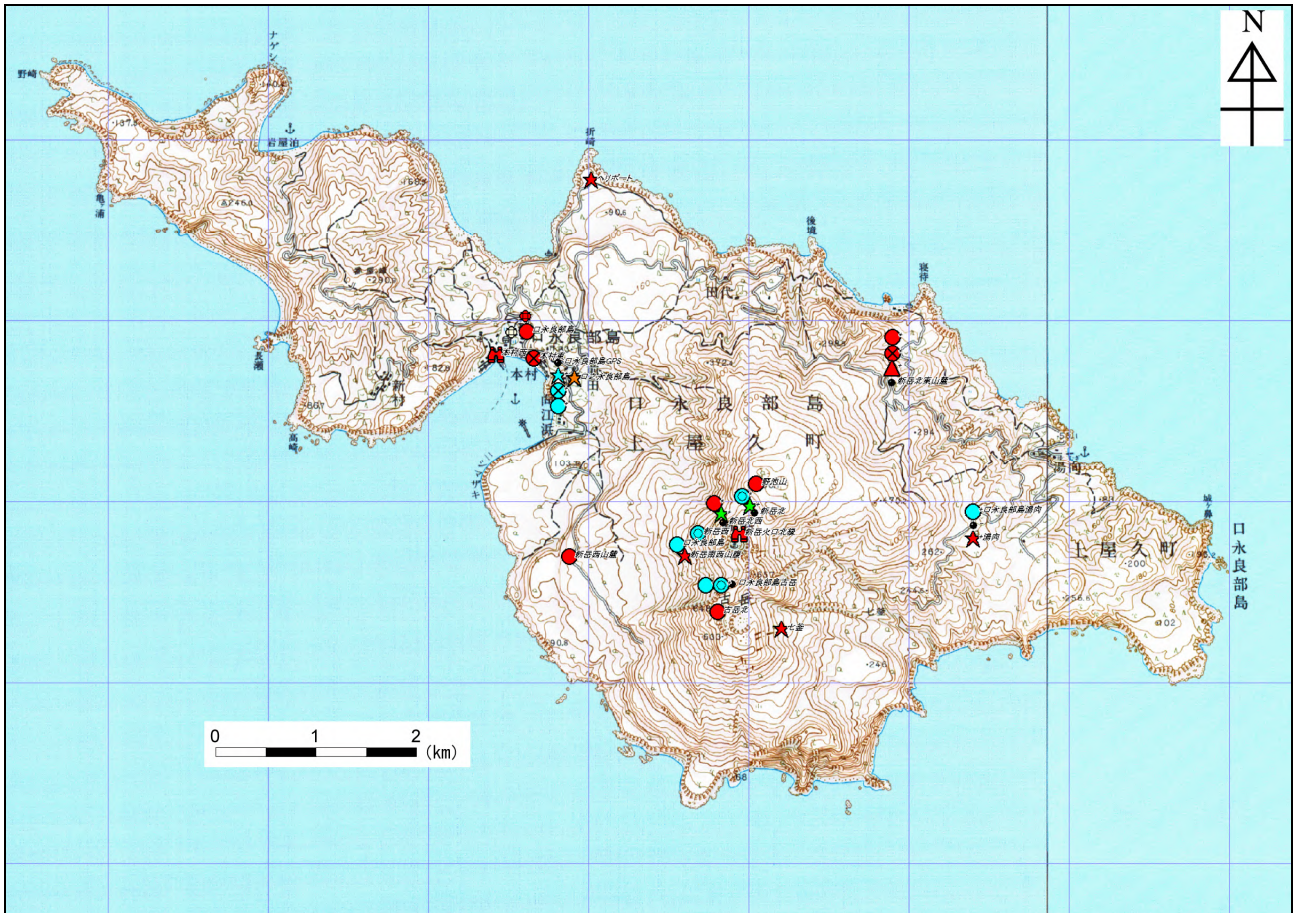
なし

関係する主な気象官署

機関・部署名	所在地	電話番号
福岡火山監視・情報センター	(福岡管区気象台)福岡県福岡市中央区大濠 1-2-36	092-725-3601
鹿児島地方気象台	鹿児島県鹿児島市東郡元町 4-1	099-250-9911

気象庁および大学等関係機関の観測網

山頂付近 同一地点に複数の計器を設置している場合には、観測点の位置を で示し、その周囲に設置している観測点の種類を示している。



国土地理院発行の5万分の1地形図(口永良部島、屋久島西北部)

凡 例		
(気象庁)	(国土地理院)	(京都大学防災研究所) (自治体)
● 地震計 (短周期)	★ GPS	● 地震計 (短周期) ⊕ 震度計
★ GPS		● 地震計 (広帯域)
▲ 傾斜計	(産業技術総合研究所)	★ GPS
● 空振計	★ GPS	● 空振計
📷 遠望カメラ		
● 震度計		

図 94-15 観測点位置図.

引用文献

- 下司信夫・小林哲夫 (2006) 鹿児島県口永良部島火山最近約3万年間の噴火活動. 火山, **51**, 1-20.
- 下司信夫・小林哲夫 (2007) 口永良部島火山地質図. 火山地質図 14, 産業技術総合研究所.
- 井口正人・他 (2007) 口永良部島火山におけるGPS繰り返し観測-1995年~2006年-. 口永良部島の水蒸気爆発発生とその後の推移の予測のための実践的研究, 25-31.
- 井口正人 (2008) 2006年口永良部島火山はなぜ噴火しなかったか. 月刊地球号外, **60**, 21-28.
- 鹿児島地方気象台・屋久島測候所 (1967) 昭和41年11月22日の口永良部島新岳の爆発報告, 福岡管区気象台要報, **22**, 79-98.
- 海上保安庁 (1981) 屋久島北西部 日本・南西諸島 : 海底地質構造図. 沿岸の海の基本図(5万分の1), 6353¹⁻⁵, 海上保安庁.
- 小林哲夫・他 (2002) 口永良部火山の噴火史. 薩摩硫黄島火山・口永良部島火山の集中総合観測(平成12年8月~平成13年3月), 169-177.
- 京都大学防災研究所・他 (1981) 1980年(9月28日)の口永良部島新岳の噴火(概報). 火山噴火予知連絡会会報, **20**, 1-9.
- 味喜大介・他 (2002) 口永良部島新岳の溶岩流の古地磁気学的年代決定. 薩摩硫黄島火山・口永良部島火山の集中総合観測, 169-184.
- 齋藤英二・井口正人 (2007) 口永良部島火山におけるGPS連続観測結果-2004年4月~2006年12月-. 口永良部島の水蒸気爆発発生とその後の推移の予測のための実践的研究, 21-24.